

令和 6 年 6 月 3 日現在

機関番号：32663

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K13223

研究課題名（和文）西洋中世の「書く」女性たち：ヘルフト修道院における知的営為とテキスト作成

研究課題名（英文）Writing Women in Medieval Europe: Intellectual Activity and Text Production in Helfta

研究代表者

三浦 麻美 (Miura, Asami)

東洋大学・人間科学総合研究所・客員研究員

研究者番号：40814893

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,500,000円

研究成果の概要（和文）： 知的営為における女性の活動と評価に関し、女性が何を書き、自らの著作活動をどう正当化したのかという観点から「書く」という行為の意義を考察した。13世紀後半の宗教文学テキストを主要史料とし、高度な教育を受けラテン語で執筆する女性が複数存在したドイツのヘルフト修道院とその周辺地域を検討対象とした。13世紀末は神秘主義への転換と信仰の内面化が特徴であり、幻視録はその典型とされる。しかし、本研究は世俗社会への言及に着目することで死後救済と寄進を関連づける伝統的修道制の影響と、テキスト作成が女性の宗教的劣位を補填する役割を持った可能性を明らかにし、宗教運動の研究に新たな視点を提供した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義は、第一に、これまでのヘルフト修道院研究が見落としてきたテキストに着目し、女子修道院と世俗社会という新しい観点から分析を試みた点にある。さらに、ここから明らかになった幻視における寄進の影響というテーマを追求することで、13世紀に盛んになった女性の宗教運動との関連づけを図った。これにより社会的、知的に孤立した女子修道院という従来の見方を修正し、俗人女性中心に論じられてきた宗教運動研究の視野を広げた点にある。

研究成果の概要（英文）： This study examines the significance of writing, in terms of what women wrote and how they legitimized their writing activities. To discuss this point, religious literary texts from the second half of the 13th century were used as the main source, and as a specific case study, the Cistercian monastery Helfta in Germany, where there were several highly educated women who wrote in Latin, was the object of analysis, including its environs. In general, the end of the 13th century is characterized by a turn towards mysticism and the internalization of faith. However, by focusing on references to secular society in visionary texts, this study has revealed the influence of the traditional monastic system, which linked salvation after death to endowments, and the possibility that text production played a role in compensating for the religious inferiority of women, offering a new perspective for the study of religious movements.

研究分野：西洋中世史

キーワード：西洋中世 ジェンダー キリスト教

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

ドイツ、ザクセン地方にあったシトー会ザンクト・マリア修道院(以下ヘルフタ修道院)は13世紀半ばから14世紀初頭にかけてマクデブルクのメヒティルト(『神性の流れる光 *Das fließende Licht der Gottheit*』)、ハッケボルンのメヒティルト(『特別な恩寵の書 *Liber specialis gratiae*』)、ヘルフタのゲルトルート(『神の愛の使者 *Legatus divinae pietatis*』、『靈的修養 *Exercitia spiritualia*』)と3名の神秘主義者を輩出した。これらのテキストはいずれも19世紀後半から校訂版が刊行され、21世紀に入ると日本語の抄訳に加え、英独翻訳も入手可能となった。

13世紀は女性が断食や不眠などの苦行や神秘体験を通じた宗教実践を求め、教会がこれを宗教運動として容認していく時期にあたり、ヘルフタのテキスト群は女性自身はその経験を記した先駆的存在として位置付けられてきた。そのため、神秘主義者自身の手になる幻視記録(『神性の流れる光』、『神の愛の使者』第2巻)が精査の対象となり、キリストの心臓である聖心や聖母マリアの母性といった頻出するレトリックから信仰の内面化、魂が上昇して神と合一する神秘主義の興隆が指摘されてきた。

しかし、女子修道院や女性のリテラシーに関する研究が近年進展するに伴い、テキスト共同体としてのヘルフタという視点が登場し、修道院全体をテキスト作成の協力者かつ読者として捉え直す試みが始まっている。また、修道院の創設文書を始めとする証書類を網羅した『マンズフェルト伯領修道院証書集 *Urkundenbuch der Kloster der Grafschaft Mansfeld*』がデジタル化され、インターネットで公開されたことから修道院の歴史、運営管理面を含めて考察しうる状況となった。

2. 研究の目的

西洋中世は原則として男性優位の社会であり、男性聖職者によって形成された宗教的価値観も例外ではない。その中で女性の宗教性は家門と財産の存続を最優先する世俗の論理と、神への絶対的服従を求める教会の論理の間を常に揺れ動きつつ、常に男性から課された制約下にあるものと考えられてきた。しかし、初期中世の女子修道院長が院の利益を優先し、自らの出身家門に不利益をもたらさうる選択をした事例が指摘されるなど、ジェンダー史への関心の高まりもあって近年は女性の選択と行動に主体性を見出すようになりつつある。その中で顕著なのは、院長や神秘主義者のような突出した個人のみならず周囲の女性たちを「共同体」の構成員として捉え、社会に女性を包摂して再評価する傾向である。

テキストの作成と受容によりつながった「テキスト共同体」は13世紀に文書作成数が飛躍的に増大するとその重要性を増した。托鉢修道会研究が明らかにした通り、聖書や教父文書、神学書などが司牧マニュアルに再編成され、修道会内外で流通したことにより新しい価値観にもとづく聖書解釈や教えが複数の経路で急速に伝播した。同様のアプローチは女性にも応用され、リテラシーをラテン語と俗語両方の知的世界の架け橋とすることで、言語で分断されてきた文化圏をジェンダーの観点から結びつける試みが始まっている。先行研究は筆耕としての修道女に注目しがちだが、本研究は作者を扱うことで神学知識の継承や修道院慣習の形成に対する女性の貢献を視野に入れる。さらに補助史料として証書を用いることで、これらの知的活動が日常生活に与えた影響の検証を行いたい。

ヘルフタにおける「書く」ことの意義を明確に示し、テキストで結ばれた共同体の姿の読み取りを可能とする史料としてハッケボルンのメヒティルト『特別な恩寵の書』、ヘルフタのゲルト

ルート『神の愛の使者』の2点を選択した。いずれも幻視の記録、修道生活の慣習と助言、伝記等が巻ごとに割り当てられ、修道女たちの信仰・生活上の関心を網羅した複合的テキストである。すでに先行研究はこれらのテキストがアウグスティヌス、大グレゴリウス、クレルヴォーのベルナルドゥスらの引用を含み、神学的にもその影響を強く受けていることを明らかにしてきた。テキストの成立背景、内容、ヘルフト内外での受容について写本も含めて考察し、女性の知的営為の多角的解明を目指す。

3. 研究の方法

上記の研究目的を踏まえ、本研究は

修道院共同体としてのヘルフトの発展過程の解明

テキストの精査を通じた神秘主義者たちの知的文脈の把握

周辺地域の宗教的状況とテキスト伝播の関連づけ

以上の3項目を2年間における研究課題として設定した。本研究計画「西洋中世の『書く』女性たち:ヘルフト修道院における知的営為とテキスト作成」における具体的な研究計画・方法は①～③の研究課題・目的に即して次の通りである。

a) ヘルフト修道院と世俗パトロンとの関係解明

2020年度に国際学会'Love in Religion: Three Helfta Visionaries'に参加し、ハッケボルのメヒティルト『特別な恩寵の書』から見たヘルフト修道院共同体と世俗パトロンとの関係から修道院の歴史を検証する。

b) ヘルフトのゲルトルート『神の愛の使者』に見る修道院共同体の形成とその特徴把握

第1,2巻のテキスト分析を行う。第2巻はゲルトルートの直筆であるために主に神学面から論じられてきたが、本研究は彼女の生涯と執筆活動の概要を記した第1巻と併せて考察し、このような神学的見解の表明がテキスト内で置かれた文化的文脈を把握する。第1巻はこれまで本格的な分析が行われていないため、使用されている語句、レトリックに注目してテキストの構造分析を行い、教育水準を図ると同時に12世以前の修道院神学が与えた影響を評価する。これにより、ヘルフトの共同体が「書く」ことをどのような戦略で正当化したかを明らかにする。

c) ハッケボルのメヒティルト『特別な恩寵の書』の神学的再評価

修道生活を扱う第3,4巻のテキスト分析を行う。先行研究はヘルフトのテキストに対しドミニコ会士アルベルトゥス・マグヌスやトマス・アクィナス、12世紀のシトー会士クレルヴォーのベルナルドゥス、サン・ヴィクトル学派等の神学的影響を指摘している。彼らの著作に見る修道生活の理念とメヒティルトの記述を比較し、ヘルフトが継承した知的財産と独自性を明らかにする。この検証により、ジェンダーが知的活動に与えた影響を論じる。

d) ヘルフト修道院並びに海外史料調査

史料調査については『特別な恩寵の書』ラテン語写本を対象に調査、デジタル化を行い、アイスレーベン、ヴォルフエンヴェッテルなどにある写本構成、テキストの改変などから受容実態を検証する。

4. 研究成果

本研究計画が採択された2020年度は新型コロナウイルスによるパンデミックとそれに伴うロックダウンで始まり、必然的に研究計画の実施に多大な影響を与えた。そのため、2年間の研究計画を2020~2023年度までの4年間に延長したが、ロシアのウクライナ侵襲による航空ネットワークへの脅威、治安悪化への懸念もあり、研究計画のほぼ半分を変更せざるをえなかった。

2020年度は『特別な恩寵の書』に関する基礎文献を発注し、aの学会報告と同時にcの基礎作業を進めた。しかし、海外渡航の制限によりaの学会は開催が延期され、最終的には2021年に開催中止が決定した。報告予定だった研究については投稿論文にまとめた。また、文書館の長期閉鎖により、dの海外史料調査を通じた写本調査とデジタル化の実施が不可能となることが早期に見通されたため、③に関しては写本調査による検証を断念し、周辺地域である神聖ローマ帝国東部地域の女性たちの宗教運動への関わりの解明を新たな目的(e)として設定した。

2021年度も引き続きパンデミックの影響下にあった。7月にはaの学会で報告予定だった研究を別の国際学会でオンライン報告した。また『神の愛の使者』の分析に着手し、近隣修道院シトー会オーバーヴァイマルの神秘主義者ルカルディスとの比較から修道院共同体としてのヘルフタの特徴解明を進め、論文集に成果を投稿した。また、『神の愛の使者』と『特別な恩寵の書』を比較した研究報告を10月に行い、成果を論文として刊行した。

2022年度は『神の愛の使者』の分析を継続すると同時に目的eの研究を進め、成果を報告・刊行した。6月には13世紀後半の神秘主義の特徴として金銭による寄進への執着を指摘する研究報告を行なった。10月には公開セミナーで本研究計画(c)の成果をSDGsにおけるジェンダーの観点から発表した。この過程で、西洋中世ジェンダー史の受容過程について日本独自の文脈を理解する必要性が明らかになった。

2023年度は6月にcの分析にもとづき、『特別な恩寵の書』を題材として女子修道院における神秘主義と日常性を扱う論考を発表した。8月にはヘルフタ修道院での現地調査及び文書館での資料調査を計画したが、体調不良のため渡航計画を中止せざるを得なかった。そこで、オンラインですでにデジタル化された写本の調査を進めつつ、前年度に引き続き周辺状況の研究を進めることとした。2024年2月にヘルフタ修道院の現地調査を行い、現地で文献収集も併せて行なった。また、前年度に判明した西洋中世主義に関する研究について、学会で報告を行なった。新型コロナウイルスのため、本研究計画の構想を大幅に転換せざるを得なかったため、当初予定していた書籍の刊行には至らなかった。今後は研究を総括する論文の執筆を速やかに進め、できるだけ早く成果を公開する準備を進めている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 三浦麻美	4. 巻 51
2. 論文標題 幻視者の誕生 中世盛期ヘルフタ修道院に見る学問と回心	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 西洋史研究	6. 最初と最後の頁 27-47
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 三浦麻美	4. 巻 12
2. 論文標題 呪詛ではなく祝福を－マンスフェルト伯家と家門修道院ヘルフタに見る13世紀末の紛争と和解－	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 西洋中世研究	6. 最初と最後の頁 128-143
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 Asami Miura
2. 発表標題 From Immobiles to Mobiles: The Concept of Poverty in Vita s. Elyzabeth by Theodoric of Apolda
3. 学会等名 Mysticism & Lived Experience Network Annual Conference (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Asami Miura
2. 発表標題 Building a Center of Pilgrimage: St Elisabethkirche in Marburg and the Indulgence in 13th Century Germany
3. 学会等名 Leeds International Medieval Congress (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 三浦麻美
2. 発表標題 名前のない修道女たちー神秘主義と西洋中世史からの取り組みー
3. 学会等名 東洋大学人間科学総合研究所プロジェクト「SDGsと人文学」プロジェクト第2回公開セミナー
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 三浦麻美
2. 発表標題 メヒティルトからゲルトルートヘーヘルフト修道院におけるlitteraー
3. 学会等名 西洋中世学会第13回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 三浦麻美
2. 発表標題 Negotiating with the Neighbor: Helfta and Count Mansfeld at the End of the 13th Century
3. 学会等名 Cistercian Worlds (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 三浦麻美
2. 発表標題 自由学芸から神学へ：中世盛期女子修道院における回心
3. 学会等名 西洋史研究会大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 三浦麻美
2. 発表標題 ヘルフタのゲルトルートー女子修道院における執筆活動の意味ー
3. 学会等名 西洋中世学会第12回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 三浦麻美
2. 発表標題 ヘルフタのゲルトルートー聖なる共同体の変質ー
3. 学会等名 中央大学人文科学研究所「歴史の中の個と共同体」研究会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 松本悠子、三浦麻美編	4. 発行年 2022年
2. 出版社 中央大学出版部	5. 総ページ数 528
3. 書名 歴史の中の個と共同体	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>「SDGsと人文学」講演録 『名前のない修道女たち 神秘主義と西洋中世史からの取り組み』 https://www.toyo.ac.jp/news/research/labo-center/ihs/20230214/</p>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------